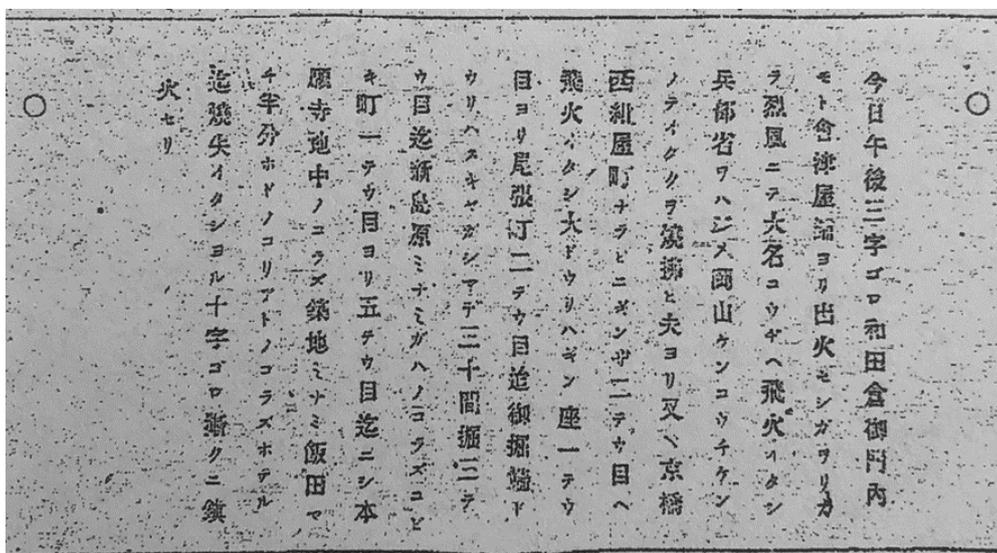


創刊 6 号、夜 10 時鎮火の「銀座大火」を翌朝に報道

創刊第 5 号を発行した 2 月 26 日、「銀座大火」があった。出火は午後 3 時。火元は和田倉門内の旧会津藩邸とあるから、今の皇居外苑である。火は強風にあおられて外堀を越え、大名小路（現在の東条駅八重洲口付近）、京橋、銀座、築地まで広がった。幕末 1868（慶応 4）年に開業した日本最初の本格的ホテル「築地ホテル館」も焼け落ちた。被災は 4879 戸、焼失面積は 28 万 8000 坪（95 万 0400 m²）にのぼった。



鎮火は 10 時ごろ、とある。

それを翌日の「東京日日新聞」第 6 号に掲載したのである。新聞の日付は 2 月 26 日（水）である。現在のように配達日の日付ではなかった。

創刊号は木版だったが、2 号からは活字を使った。しかし、活字が不足していたのか、本来漢字を使うところがカタカナになっている。

この第 6 号紙面の最後に「当社新聞活字未ダ全クソロワズ…」とお詫びを載せている。

それにしても、大変な速報である。現場で取材して、日報社の置かれた「浅草茅町（かやちょう）1 丁目 24 番地」、創刊 3 人組の 1 人、戯作者・条野伝平（1832～1902 山々亭有人）の自宅に戻り、原稿を書き、活字を拾って、印刷する。創刊号は 1 千部発行したといわれるので、徹夜作業だったに違いない。

今吉賢一郎著『毎日新聞の源流』（毎日新聞社 1988 年刊）に、「東京日日新聞」創刊の地の地図が載っている。

火事取材を終えて、銀座から現在の JR 総武線浅草橋駅近くの「日報社」条野宅に戻るのだから、新聞の活字が組み上がったのは、翌 27 日未明であろう。

ついでながら条野宅で発行していたのは 20 号までで、明治 5 年 3 月 12 日付から元大阪町新道、辻伝右衛門邸宅に移った。現在の中央区日本橋人形町 1 丁目。



辻は《銀および銀貨を管理した江戸「銀座」役人の筆頭》《資金力を背景に日報社（東京日日新聞の発行社）にかかわった》と今吉さんは説明している。

さらに明治 6 年 2 月 25 日付から浅草河原町 16 番地に変わった。地図にある江戸通りの交差点の角地だ。

日報社は、1874（明治 7）年 5 月 11 日銀座 2 丁目 3 番地（メルサ銀座 2 丁目店のあるところ）→2 年後の 1876（明治 9）年 12 月 31 日尾張町 1 丁目 1 番地（現在銀座 5 丁目、名鉄ニューメルサ）に移転した。

「銀座大火」で不燃都市東京を目指し、銀座は洋風建築の「赤レンガ街」となった。銀座通りの幅もその時の都市計画で決まった。幅 15 間（27・3 m）、両側に幅 3 間半（6・37m）の歩道を取り、車道は 8 間（14・56m）となった。この道幅は、現在も変わっていない。



銀座 2 丁目社屋、三代目広重画

尾張町への移転は、レンガ街最大の建物呉服商「恵比寿屋」が倒産、その後に入った。創業 5 年で「銀座の顔」になったわけだ。

（堤 哲）